県政タウンミーティング会議録

開催日時　令和４年12月20日（火）　10：30～12：00
開催方法　オンライン開催
テ ー マ　不登校児童生徒が安心してまなぶために必要なこと
参 加 者　111名

【こども若者局次世代サポート課長　塩原昭夫】

それでは皆さまお待たせいたしました。ただいまから県政タウンミーティングの開会をさせていただきます。私は本日の司会進行を務めさせていただきます長野県こども若者局次世代サポート課長の塩原と申します。よろしくお願いいたします。

本日は、多くの皆さまにご参加をいただきましてありがとうございます。県政タウンミーティングでは知事が県民の皆さまと直接対話を行わせていただくこととしております。本日はオンラインで開催をしております。また、手話通訳をお願いしてございます。小さい画面で恐縮でございますけれども、左上の画面で手話通訳を行っていただいております。よろしくお願いいたします。

本日は、不登校児童生徒の学びのあり方等につきまして、知事と当事者、それから支援者の皆さまとで今後のより良い方策についてディスカッションを行い、県民の皆さまとの意識共有を図るために開催させていただきます。

現在、県では来年度からの次期長野県総合５か年計画及び次期長野県子ども・若者支援総合計画などの策定を進めており、皆さまのご意見ご要望をお聞きし計画策定に活かしてまいりたいと考えております。よろしくお願いします。

本日はオンラインで111名の皆さんにご参加いただいており、このうち15名の皆さまからご意見をいただきますのでどうぞよろしくお願いいたします。

それでは開会にあたりまして知事から挨拶をお願いいたします。

【長野県知事　阿部守一】

皆さんこんにちは。上着を着ていると堅苦しいのであえて上着を取らせていただきました。どうも県がやると皆さんご意見を言ってねという話で、堅い話になってしまい過ぎるので、継続的にこういう会議をやっていきたいと思っていますので、継続的にやるには肩の力を抜かないと継続できないので、私も抜かせていただきますので皆さんも気楽に発言をしていただきた

いと思います。ただ、テーマは気楽なテーマではないので、そこは私もしっかり気を引き締めていきたいと思いますが、こういうかたちで不登校関係の皆さんとお話をさせていただくのは、不登校を考える会の皆さんとお話をさせていただいたことがきっかけです。まず、関係の皆さんに感謝申し上げたいと思います。その後ずっと県内市町村を回って県民の皆さんとの対話集会を行わせていただいていますが、結構教育の話がどこでも出てきます。いろんな課題がありますが、長野県においては学びの場の選択肢が少ないというご意見が結構多いです。これは不登校、不登校じゃないということにとどまらず、もうちょっと多様化したいという感覚の方が多いですけれども、なかでも例えばフリースクールがない地域はなんとかしてほしいという声もあります。あるいは、学校自体ももっと多様化してほしいという意見もあります。そういう意味でも私も悩んでいます。というのは、小中学校は市町村立学校でかつ教育委員会が所管しているので、行政の中では私からは最も遠い世界です。とはいえ、県民の皆さんの願いとしては、１つは学びの場をもっと多様化してほしい、それからもうちょっと踏み込んで言えば学校教育のあり方そのもの自体をもっと変えるべきじゃないかというようなご意見もあります。私自身の問題意識としては、これは学校に限らず、日本の社会は決まったルートを安全に歩んでいると誰からも文句を言われないし問題扱いをされないですが、ちょっとずれると大丈夫？という感じの扱いになって、中々いろんなところに見えないバリアというか壁があるんじゃないのかなと思います。これは私自身の感覚で、私も一時期学校があまり好きではない時期があったりしたので、平均台の上をバランスよく歩いていればいいけれど、ちょっと１歩踏み外してしまうとどうなっちゃうのかなということが私も学生時代結構心配したこともあります。そういう意味では子どもたちの立場になって考えるといろんな課題もあるんじゃないかなと思いますし、そうした子どもたちを支えている保護者や支援をしていただいている皆さんにも、保護者あるいは支援者としての悩みや課題があると思います。そういうものを共有させていただいて、我々行政ができることはしっかり取り組んでいきたいと思いますし、逆に地域の皆さんが結束して取り組んでいただかなければいけないこともあると思います。また、私いろんなところで船頭してしまっている感じがありますが、保護者や地域の皆さんからもっと声をあげてもらわないと教育自体が変わらないところもあるので、ぜひ今日もフラットな立場で言いたいことを言って、言いっぱなし聞きっぱなしだと建設的じゃないので、今日の話を通じてこんなことが見えてきたとか、こんなことに次取り組みましょうという方向性が見えればありがたいなと思っていますので、ぜひよろしくお願いいたします。今日はありがとうございます。

【次世代サポート課長　塩原昭夫】

ありがとうございました。

では本日の進め方につきましてご説明をいたします。本日は多くの方にご発言いただくため、最初は３つのグループに分けて発言をいただきます。発言いただく皆さまには事前に順番をお知らせしてございますが、まず第１のブロックでは当事者、その他の皆さま５人の方に意見を発表していただき、一旦そこで区切りまして知事や他の発表者の皆さまと意見交換をいただきます。次に、２つ目のブロックでは支援団体、行政関係者の皆さま４人の方に発表をいただき、ここでも一旦区切りまして知事や他の意見発表者の皆さまと意見交換をしていただきます。最後に、３つ目のグループでは学校関係者の皆さま３人の方に意見を発表していただき、知事やほかの発表者の皆さまと意見交換をしていただきます。その後、時間が許す限り参加者の皆さま全員と我々とで本日のテーマ全般について意見交換をさせていただければと思っております。後半の議論の時間も取らせていただきたいと思っておりますので、最初のご発言につきましてはお一人あたり２分以内でお願いをしております。特に強調されたい点を中心にご発言をお願いします。意見交換には本日Zoomにて接続している方が自由に参加できますので、Zoomの挙手ボタンを押していただき司会からの指名があってからご発言をお願いします。

それでは早速ではございますが、当事者、保護者の皆さまということで最初のお一人目でございます。まずＡさんからお願いをいたします。

【参加者Ａ】

子どもが不登校になった時に、何とか学校に行ってほしいと願う親が大多数です。そのために子どもが学校に行かなくなった時に親子で行く行かないというバトルが繰り返されたりだとか、夫婦間で口喧嘩があったりだとか、それからおじいちゃんおばあちゃんから咎められたりということが現状起きています。

この状況を何とかしようと家族以外に相談をしたら、いまだに再登校を目的とした支援が展開されるという現状をよく聞きます。子どもが辛いとか安心できないと思うから子どもは学校に行かない選択をしているのに、再登校を促すということは子どもの行きたくないという思いを無視して親の気持ちを子どもに押し付けていくことになってしまいます。こんな時に子どもは、こんな自分はダメな自分だなと自分を責めてしまうこともあります。私もそんなダメな親の１人でした。これでは学校に行かない選択をした子どもが、自分を認めて安心して毎日を送って、つまり学べる環境のベースなんていうことは一切できなくなってしまいます。

こうした背景になるには考え方だけではなくて、子育て環境の原因もあると思います。学校に行かない選択をした時に、子を１人自宅に置いて仕事に行けないという親の事情もあります。学校に行かなくても家以外の安心できる場所が必要になるのではないかと思っています。したがって、学校に行かない選択をした子どもが過ごせる居場所を用意する必要があると思ってい

ます。現状はそうした場所は必要性を感じた先輩の親たちや元学校の先生とかが、民間で手弁当で結構用意してくれてはいますが、どこにでも存在するわけではありません。実施しているところもボランティアくらいの運営になってしまっていると思います。学校に代わる子どもの居場所になるわけですから、公立学校同様に公設で用意したり民間で実施するところの運営を支援するかたちで、何とか子どもが学ぶ環境のベースになる居場所というのが必要ではないかなと思っています。

私からの最初の発言は以上になります。よろしくお願いします。

【次世代サポート課長　塩原昭夫】

Ａさんありがとうございました。次にＢさん、お願いいたします。

【参加者Ｂ】

よろしくお願いします。10歳です。今回は発言権をいただきありがとうございます。

今回は子どもが安心して学ぶために必要なことというテーマですが、まず僕は小学２年生の頃から不登校になってしまいました。なぜ学校に行くのが嫌になったかというと、僕は２年生の頃、化学の元素にはまったんですが、でも周りの小学生たちは「それって勉強なの？」とか「皆と違うことをやっていてずるい」と言ってきました。それで僕は自分のやりたいことができなくなってしまいました。そして学校を休むようになり、授業にも遅れを感じるようになりました。そして学校に行けなくなりました。だから「学校に行っていないの？」という言葉が深く心に刺さるようになりました。

でも、僕は１つ気付いたことがあります。元素を学ぶ上で漢字やアルファベット、文章を読んだりまとめたりする力が必要になりました。だから僕は５教科をまんべんなくやらなければいけないと今までは思っていたんですが、５教科を区切る必要はないと思うようになりました。それよりも好きなことを楽しく学びたい。残念なことに今の学校はそうなってはいません。20、30人で一斉に同じことをやり、同じやり方で学び、僕らが数字や記号で評価されます。でもそうではないフリースクールのような場所が必要だと思っています。自分の興味を持ったことを邪魔されずに学べる場、そしてまだ自分の興味が分からない、そういう子だって何かを見つけられるような場所が必要だと思っています。

単純に与えられたことをやるのではなく自分で選べる、それこそが子どもが安心して学ぶために必要なことだと思っています。そういう場をつくる上で、阿部知事さんにはぜひご理解とご支援をいただきたいです。子どもが選べる環境をぜひ増やしてください。よろしくお願いします。以上です。ありがとうございました。

【次世代サポート課長　塩原昭夫】
　ありがとうございました。次にＣさんお願いいたします。

【参加者Ｃ】
　本日はよろしくお願いします。私は、小学３年生の長男が今学校に行かなかったり行ったりというような状況にある中で、発言権をいただきありがとうございます。
　先日私は、神奈川県川崎市が運営している「子ども夢パーク」を題材にした映画「ゆめパのじかん」というのを見せていただきました。知事もご存じかもしれませんが、そこは川崎市が運営している場所ですが､子どもがやりたいことを自由にできるというとてもよい環境でした。それを見て、長野県は川崎市とは違って地域も広くて公共交通というのも少ないので、そういった居場所をつくったとしても子どもが１人で行ける場所というのは限られてしまって、そこに行くためには親の送迎が必要になるということが多いと思います。また、長野県は自然豊かな場所でそういうところでの学びというのがとても大事だなというふうにも思うので、そういったところで学びをさせたいという思いがあると、さらに送迎ですとか車を利用しないといけない場所が多いと考えています。先ほどＡさんもＢさんも言っていましたが、そういった子どもが行けるような居場所、フリースクールのようなところが県内の各地でできるといいなというふうには私も思っているんですけれども、そういった場合にもちろんそういうところの場所をつくるということもですが、学校の代わりになるということで、スタッフもある程度充実させなければいけないというところと、今言いましたように公共交通機関が少ないためにその場所に行くために子ども１人では行けないので、そこに行くための交通手段を確保するということが必要になってくるかと思いますので、その３点を取り入れたような居場所を県内各地につくる、またはそのようなことを現在やっている方々に対して支援をするということを、ぜひ県としても支援をしていただければと思っております。以上です。ありがとうございます。

【次世代サポート課長　塩原昭夫】
　ありがとうございました。それでは次にＤさんお願いいたします。

【参加者Ｄ】
　よろしくお願いいたします。私は小学校３年生になる娘の母親です。
　公立の小学校に３年前に入学したんですが、１年生の冬から完全に不登校になって今不登校３年目です。現在は子育てサークルを保護者の仲間と立ち上げて、今小学２年生から中学２年

生までの子どもたちと、あとは信頼のできる先生にも出会うことができて、ご協力をいただきながら学習とか野外活動とか毎日活動しております。

今日私がお話したいのは２つありまして、１つ目は教育バウチャー制度の可能性についてぜひ知事に検討していただきたいということ。それから２つ目が高校受験の時に必要な内申書、要は学習の履歴を中学校以外のもの、例えばフリースクールが書いたものなどもぜひ認めてもらって、高校進学の門戸を広げていきたい、そこについてご検討いただきたいと思っています。

１つ目のバウチャー制度ですが、こういったフリースクールや一条校以外のところは我々も含めて100％自己資金、自己負担で、保護者ももちろんですが運営側の負担がものすごく課題になっていて、やっぱりお金の問題、所得の格差が子どもの教育格差につながるということが不登校の中でも起き始めていると。そういったところで、今行政予算が公立の所属校に流れていっているものが、きちんと子どもが自分がこの場所で学ぶんだと選んだところ、そこがきちんと学びを保証しているということを見ていただいて、そこでよければそこに予算が流れていくような仕組みを今後検討いただけたら、不登校であってもなくても安心した学びの場の確保としていただけるのかなと考えています。

もう１点の内申書についてですが、こちらについてはとにかく今後不登校の子どもたちが１番大きなハンディキャップを感じるのが高校進学、義務教育を出る時です。ここでとにかく中学校に通わないと内申書を書いてもらえないから高校に行く選択肢がない。勉強して頑張っていたけれど合否判定で同等に扱ってもらえない。そんなプレッシャーの中にいます。なので、学習の履歴というものを示すものが内申書だけではなくて、中学校が出してくれるものだけではなくて多様なものが認められていくと、これから社会に出るところのステップでもっと広い選択肢を持って進んでいけるのかなと考えています。ぜひ知事にも遊びに来ていただけたらと思います。以上です。

【次世代サポート課長　塩原昭夫】

ありがとうございます。第１ブロック最後になりますが、Ｅさんお願いいたします。

【参加者Ｅ】

こんにちは。私たちの意見は２つあります。１つ目は不登校の定義に当てはまらない隠れ不登校のような児童生徒が多くいるので、その実態を把握してほしいということです。子どもたちの状態は実は一人ひとり違っています。学校に行ける行けない、自分のクラスに行ける行けない、フルタイム登校できる、または短時間だけの登校、自分で登下校できる、親が送り迎えしているなど、いわゆる不登校の定義には当てはまらない子どもたちでも、親子ともに苦しん

でいる子もたくさんいるので、まずはその実態の把握をしていただきたいです。

２つ目の意見は、そういった子どもたちが安心して学ぶための環境を整えてほしいということです。そのための１つの案として授業のオンライン配信を行ってほしいと考えます。私たちの子どもの通う小学校には学校内に中間教室がありますが、そこでは学習の機会がありません。原級へ行かないと授業を受けることができず学習のフォローもありません。そこでパソコン、タブレットなどで授業のオンライン配信を行ってほしいです。自宅や中間教室など子どもたちにとって安心できる場所で、リアルタイムの配信を一方的に見るだけでもいいです。

以上、定義に当てはまらない子たちの実態把握、授業のオンライン配信、私たちの意見はこの２点です。ありがとうございました。

【次世代サポート課長　塩原昭夫】

ありがとうございました。

それではここで一旦区切らせていただきまして、ただいまいろいろご発言いただきましたが知事のほうから何かご意見等ございますか。

【長野県知事　阿部守一】

ご意見というか一緒に考えていきたいと思うんですが、Ｂさん、全く言っていること100％私は賛成なので、教育を一緒に変えましょうね。協力してね。Ｂさんの発言がこれからの教育のあり方だと私は思います。今の当たり前というのがたぶん当たり前ではない世の中にしていかなければいけないと私は思っていますので、ぜひよろしくお願いします。

居場所の話は共通する話なので後に送らせていただいて、具体的な話として出てきている中でも、教育バウチャーは、私は少なくとも義務教育段階においては本来あるべきものではないかなと思っています。教育の権利が憲法で保障されているのに、別に学校に行かなければいけないとは憲法上書いていないので、教育を受ける権利を保障する意味では、本来教育バウチャーはあるべきだと私は思います。あと予算を誰がどうするかという話で、市町村立学校なので本当は市町村にやってもらいたい気は正直あるんですが、とはいえここまで県もコミットしてしまっているので、市町村と一緒に何かそういうものが考えられないのかなと。もう一方でそのバウチャーを使っていくフリースクールとか居場所のところを、一定程度どういうものに、行政のお金を使うとしたらレベル合わせというか子どもが行ってとんでもない環境のところだというわけにいかないのでそこの標準形と、それからたぶんバウチャーはまさにおっしゃるとおりセットの話かなと思いますので、そこは重要な話だと思います。

高校の内申書の話は以前もお話いただいて教育委員会にも言ったんですが、教育委員会はど

ういう回答をしているんでしたか。

【教育委員会事務局】
　内申書について、不登校であってもそれは不利になることはないということで、今の制度も新しい制度についても同様でございます。

【長野県知事　阿部守一】
　たぶんそれがよく理解できていない。私も理解できていないんだけど、不利になることはないというのはどういうこと。フリースクールとか第三者の代わるものでもいいんですか。

【教育委員会事務局】
　書式は統一ですけれども、評価をするにあたっては学校内だけではなくその子が活動している場所と連携を取って、その情報を内申書に書いていただくということで今進めているところですし、それをもっと広めたいと思っていますので、それによって不利にはならないということです。

【長野県知事　阿部守一】
　聞いている人でもう少し議論してもらったほうがいいと思うんですが、内申書の話は私の権限ではないので、教育委員会が納得してくれないと変わらないと思うんですがどうですか、Dさん。

【参加者D】
　制度とか決まりとか大きな方針としては今お話いただいたような筋が立っていると思うんですが、実態は今一人ひとりの子どもが目の前の担任の先生、在籍校の先生との間で起きている会話というのは、そろそろ中学生になってくると内申書のこともあるから学校に来たらとか、要は出席をきちんととるために学校に来たらという会話になっていく。それによって将来のことを考えるために学校に行かなければいけない。行きたくない場所なのに行かなければいけないみたいなジレンマがとても生まれているというのは事実としてまだ身の回りで起きているというところの、目指している方向性と今起きているこのギャップ、ここについては丁寧にすり合わせをして、教育委員会がきっと大きな旗を振っていただくことになると思うんですが、そこでやっぱりチューニングしていっていただきたいなというのが正直なところであります。

【長野県知事　阿部守一】

冒頭、Ａさんからいまだに再登校を促す支援が行われているという話がありましたが、私気になっているのは誰がそういう指導をしているんでしょうか。学校ですか。

【参加者Ａ】

基本的には親もやっぱり学校に行かせたいというのもあるんですが、自分たちの経験から言うと、例えば登校日数ということが言われると、中学の場合は今やっているかどうかはわかりませんが、学校の門にタッチするだけで登校日数にするとか、そんなことが実際にあるんです。これは学校の先生との間でありました。そういうことがあるから起きてしまうということなので、そこの考え方、特に今の内申の話でいうと子どもにもちゃんと分かるように説明してあげたほうがいいと思います。親にも子どもにもそれは必要ないよと、ちゃんとそれ以外のあなたのことを評価するんだよということをやっぱり伝えるということを、これは現場の先生も含めて浸透させていただきたいなと思います。

【長野県知事　阿部守一】

今日は学校の先生も参加してもらっている人いるんですよね。今の話、学校の先生は聞いていてどうでしょうか。

【参加者Ｆ】

中学校の教員です。お願いします。

今言われたところですけれども、10月末に不登校生を中心とした高校進学相談会というのを教育事務所でやったんですが、そこに行くと学校に通えない子が高校受験をして、高校ではすぐに退学になってしまうんですよという説明をされてしまいます。私はそんなことどうでもいいと思っているんですけれども、どうでもよくはないですけれども、そういうようなことについては真剣に考えてもらえればいいのかなと思いますけれども、そんなふうに言われてしまいますので、そのことについては一応登校したほうがいいんじゃないかということは、どうしても言ってしまうところはありますよね。以上です。

【長野県知事　阿部守一】

それは、不登校の子どもが高校に行ったら困っちゃいますよというふうに言われちゃうということでしょうか。

【参加者Ｆ】

そうですね、私のところでは学校に来ないというような感じの子については、月に１度ずつ支援会議をやって、おうちの方と本人と学校とその他の支援機関のところでそれぞれ会議をして、この１か月間はどういうふうにやっていきましょうみたいなことをやっていきますので、それについては一つ一つ丁寧にやっています。

【長野県知事　阿部守一】

Ｆ先生ありがとうございます。今の高校入試のところは１つ課題なんだろうなという気はします。テイクノートしておきたいと思います。

あとは、親御さんのグループから２つ提言があった隠れ不登校の実態把握と授業のオンライン配信で、授業のオンライン配信は、私はどんどんやったほうがいいと思っています。これは学校の先生もいるのであれですけれど、私は学校の先生の役割はこれから変わらないといけないと思っていて、私が子どものころに受けていた授業はだんだんオンラインとかで代替されてしまうと思います。

１番聞いていて分かりやすい先生の動画を撮って流せば基本的な伝達はできるので、先生の意義というのはただ教壇に立って一方的に教えるのではなくて、子どもに寄り添ってどう子どもの学びをファシリテートするかとか、あるいは子ども同士のコミュニケーションをどうサポートするかというところに力点が変わっていくんじゃないかなと思っているんですが、そっちの話にいくと広がり過ぎちゃう。授業のオンライン配信は今授業として認められないんですか。制度的には認められるんですか。例えば家あるいは別教室にいてオンラインで授業を受けたら、それは授業を受けてちゃんと学んでいるということにカウントしてくれる制度かどうかとかどっちですか。

【教育委員会事務局】

出席扱いとしてカウントされます。

【長野県知事　阿部守一】

出席扱いにはなっている。どこまで認めてどこまで認められないの。例えば、私が学校に行かずに家にいて、それで授業を受けていてもそれはＯＫですか。

【教育委員会事務局】

それはずっと通い続けている子と自宅にいる子との出席の整合性という議論があるので、そ

こははっきりと確認できていないところではあります。ただ、流れ的には知事のおっしゃる方向に進んでいくというふうには理解しています。

【長野県知事　阿部守一】

私、長野県からもっと変えられないかなと思っているんですが、オンライン配信の話は制度的な話もあるので課題として引き取っておきます。

隠れ不登校の実態把握は、学校の現場の実態で県の教育委員会や市町村の教育委員会は、どれぐらい把握しているんですか。隠れ不登校というのはもう１回教えてもらいたいんですが、今の不登校は今の表というか示してもらっている１番上だけが不登校になっているという理解でいいんでしょうか。

【参加者Ｅ】

文部科学省が出している不登校の定義ということですと、何らかの心理的要因、身体的あるいは社会的要因・背景により登校しない、またはしたくてもできない状況にある、病気とか経済的な理由を除いて年間30日以上欠席というと不登校ということになっていると思います。

【長野県知事　阿部守一】

狭すぎるということですよね。それは実際教育をやっている人たちはどう理解しているんですか。

【教育委員会事務局】

各学校でそれぞれの休み具合に応じてだとは思いますが、確かにいろいろな状況の子がおりますので、そういった実態把握は研究していくことで、県教育委員会として可能だと思っています。

【長野県知事　阿部守一】

実態把握は市町村教育委員会の協力ももらわないとできないので、やっていかなければいけないと思いますが、その問題意識は、本当は支援してもらわないといけない子どもたちや家族がちゃんと視野に入っていないのではないかという疑問だという理解でいいんでしょうか。はい、わかりました。そこも課題として受け止めておきます。

時間がなくなってしまうといけないので、他の方の発言もいただいてからまた意見交換したいと思いますが、よろしくお願いします。

【次世代サポート課長　塩原昭夫】

ありがとうございます。

それでは第２のブロックに移らせていただきます。ここでは支援団体、行政機関の担当者の方ということになります。まずＧさんお願いいたします。

【参加者Ｇ】

よろしくお願いします。私は放課後等デイサービスの事業に従事させていただいています。このたびは発言の機会をいただきありがとうございます。

当事業所では、授業活動時間外に週２日程度、午前中に地域に向けて施設開放を行っています。そこには不登校の子や学校に行き渋りがある子など、常時５名程度が活動に参加しに来ています。活動に至った経緯ですが、日々子どもや大人と接する中で何もしないボーっと生きる空白の時間や場所の必要性を感じました。地域の中で子どもたちが安心して過ごせる場所の１つになればと思い、施設開放を行いました。生活課題や行動の課題の背景にある感覚にまつわる事柄を読み込みながら、遊びの中でできるマッサージや軽運動など本人の課題に沿って過ごすことはありますが、基本的に決まったプログラムはなく、子どもたちが各々好きに過ごしています。施設内ではコミュニケーションゲーム系のボードゲームやカードゲームをして過ごすことが多いのですが、施設裏に公園があるのでそこへ行って過ごすことが多いです。

良い影響ですが、本人の意思を発達の視点における表出の差、活動サポートとして尊重しつつ学校とも連携相談を随時行っています。活動を通じてスタッフとの関係性を作っていくこと、来場者同士での関係性のサポートからポジティブな影響が多く出ています。週に１、２回程度の参加ですが、生活環境の変化の改善が生まれています。ゲームをするしかない生活から少しずつ他の活動やその活動から様々な興味関心が生まれ、また他の活動へのきっかけになっています。また、自宅からではないものの当事業所から学校のオンライン授業へ参加することもあります。そこから興味関心が湧いたのか、日々の活動の中では活動の中にアカデミックな内容が含まれることがありました。最近では中学校見学の興味が出てくるなどが挙げられています。

現状課題ですが、やはり不登校の状態になると療育の機会が失われてしまうというのが大きいです。不登校ということが原因で福祉サービスの利用ができない、または利用開始までに時間がかかってしまい、現状では利用開始になるまでに１年経っている子もいます。先生方とはうまく連携できており、オンライン授業にいつでも接続できるようにしていただいて、１人の子に対してチームで丁寧に関わるということができています。あとは、先ほどのところでも出ていましたが、ご家庭負担ということがやはり大きい課題になっております。以上になります。

ありがとうございます。

【次世代サポート課長　塩原昭夫】
　ありがとうございます。それでは続きましてＨさんお願いいたします。

【参加者Ｈ】
　今日は発言の機会をいただきましてどうもありがとうございます。
　今日は３つお願いしたいことがあります。１つ目、各市町村での不登校当事者の実態調査アンケートの義務化です。先ほどもお話が出ました当事者の実態を把握していただきたいということです。それから２つ目、中間教室や適応指導教室を民営化していただきたいということ。それから３つ目、各自治体への子どもの権利や基本法についての教育政策アドバイザーの設置義務をお願いしたいということです。
　まず１つ目の不登校当事者の実態調査アンケートの義務化についてです。子どもの権利条約の一般原則というものに子どもの意見の尊重というものがありますが、私たち大人のみならず子どもたち自身も子どもが社会や学校に対して意見を表明することができる、してもいい、その権利があるということをほとんど知らないでいます。不登校というのは、そんな子どもたちが命をかけての精一杯の意見表明ということをまず分かっていただきたいです。ご存知のように10月の文科省の調査で明らかになりました不登校児童生徒数の件ですが、その不登校の要因の多くが無気力や不安という調査結果が出ています。しかし、これは学校や教師の視点からの調査であり、不登校当事者の声ではありません。本人たちがなぜ不安や無気力感を感じているかというところが明らかにされていないのです。過去にも、県の心の支援課が行ってくださいました不登校児童生徒の当事者アンケートというものがありました。不登校の要因として教師との関係を多くの当事者が挙げているのに対し、学校視点からの調査では家庭の問題であるのが要因であるという結果が多くありました。
　このように、学校の視点からの調査と当事者の調査の結果には大きな乖離がみられます。不登校当事者の本当の声を聴くこと、そしてそれを政策に反映させていくことが不可欠であると考えています。実際に、ある市では総合計画の中で不登校児童生徒の支援について中間教室の充実等に取り組んでいくと明示されているのですが、現在中間教室の利用者数がとても少ないのが現状です。それでは何人の市内の不登校児童生徒が中間教室の利用をしているのか、そして利用していない生徒が日中どこでどのように過ごしているのか、中間教室を利用していない不登校児童生徒がなぜ利用していないのか、どのような場所なら利用したいと思えるのか、そのようなＰＤＣＡのＣの部分が全く行われないままに行政が想像のみで施策を行っているとい

う実態があります。当事者の声が全く反映されない施策となっております。実際、今年の８月に私たちの団体は市の教育長との懇談の機会をいただきまして、同様の当事者アンケートの提案をお願いしたのですが、残念ながら華麗に流されてしまい実施に至っていないという状況です。ぜひこのような不登校児童生徒の声や意見を表明する権利をきちんと保障した上で施策を行っていただけるように、不登校児童生徒本人たちへの実態調査やアンケートの実施を自治体に義務付けていただきたいと思っています。

２つ目、中間教室の民営化というのは、先ほどからお話をしています中間教室の充実に取り組んでいきたいということで､内容をもっと子どもたちを真ん中にしたものにしてほしいです。入れ物を用意して人員を配置すればそれで終わりではないです。子どもたちというのはやはりそこに誰がいるのか、子どもたちに対するどんな眼差しを持った大人がいるかということでそこに行きたいと思うかどうかが決まってきます。ですので、官民協働連携をしてぜひ民間の力を使っていただきたいと思っております。

それから子どもの権利、子どもの基本法というものについて、行政もあまり理解が進んでいないのかなというような感じが見受けられますので、ぜひ子どもの権利や基本法についての教育政策アドバイザーというものを各自治体へ設置していただければいいなと考えております。以上になります。どうもありがとうございました。

【次世代サポート課長　塩原昭夫】

ありがとうございました。それでは次にＩさんお願いいたします。

【参加者Ｉ】

よろしくお願いします。

阿部知事、先日は県民対話集会へお越しいただきありがとうございました。私は不登校の中学生の保護者であり、放課後の子どもの居場所の運営をしながら不登校の子どもの場づくりや不登校相談をしております。

信州の子どもたちのために、阿部知事そして長野県に３つお願いしたいことがございます。１つ目は、自治体を越え地域で連携した不登校支援です。長野県に多い中山間地域では、小さな自治体単独での不登校の子どもたちへの多様な学びの場の提供は困難です。近隣の自治体で連携しそれぞれの地域の社会資源をシェアすることで、学びの選択肢が増えると考えます。不登校については市町村教育委員会や学校の認識に温度差があります。不登校支援にも激しい格差があるように感じます。市町村ごとの不登校支援格差の是正のために、県主導で不登校支援の地域連携の推進をお願いいたします。

２つ目は、不登校特例校の設置についてです。分教室型の特例校を複数設置するなど、中山間地域の子どもたちが通いやすくなるようにしていただけるようお願いいたします。不登校の子どもたちが楽しいと思える学校は、そうでない子どもたちにとっても楽しく通いたくなる学校です。子どもが主体の不登校特例校の実践を参考に、県下の他の学校運営に活かしていただきたいと思います。子どもが中心の価値観が長野県の公教育全体に広がることで不登校が少なくなると考えます。

３つ目は、不登校の子どもたちとの対話です。「夢みる小学校」というドキュメンタリー映画の自主上映会が盛んに開催されています。この映画では伊那小学校など子どもが主体の学習が行われている学校が紹介されています。私も子どもとこの映画を観たところ、子どもがこんな感想を言いました。「映画の中で専門家の人たちが言っていることは自分が知っていることばかり。不登校でゲームをしながら考えていたことばかりだった。」不登校の子どもたちが日々感じていることが詰まった「夢みる小学校」。阿部知事と不登校の子どもたちに一緒に観ていただき、映画の感想を共有しながら子どもたちの意見を聴く機会を設けていただけないでしょうか。不登校支援はまず当事者、つまり子どもの意見を聴く、子どもファーストの価値観から始まると思います。３年前から私どもも学校の外で子どもを真ん中にした居場所づくりをし、子どもたちがいきいきと変わりました。このたび発表の機会をくださりありがとうございました。

【次世代サポート課長　塩原昭夫】

ありがとうございました。続きましてＪさんお願いいたします。

【参加者Ｊ】

お願いします。私は心理カウンセラーをさせていただいています。普段から不登校傾向の強い子やその子を支えるご家族の思いを受け止める中で、私の個人的な感想として不登校の問題の根幹を考えてみたいと思います。

教育現場を経済優先の社会に利用するための場から、子どもたちが子どもらしく遊び学べる場に返すべきであると考えています。頭を働かせるよりも前に、心が働く子どもや人間を育てていくべきだと思います。現代社会における子どもたちの状況は、大人の世界の実現に利用する子どもの存在、その大人たちの投網にからめとられているために子どもの自然な世界が奪い取られ続けています。子どもは自然発生的な異性、異年齢の子ども集団の遊びの中でこそ、主体的に人間としてのたくましい基礎が育まれると思います。義務教育内で定着すべきことというのは、英語教育でもＩＴ言語教育でもないと思います。そういう基礎、基本の読み書きそろばん、そういう計算または計算機器の扱い等も含むそういったものであっていいと思います。

デジタル的な習得ではなく、本当に個性が活かされる丁寧な手塩にかけるかのようなアナログ的な習得を基礎とする教育現場の実現というものが必要だと思います。

以上の内容の習得というのは自己選択、自己責任として自分の興味関心に合わせて選択する自由を与えて、学びたい内容を学びたいだけ学べるような環境を保障し展開していくべきだと思います。一律的な内容を強制的に詰め込み、その習得量によって相対的に点数を付与し相対評価に終始するような教育体制を構造的根本的に改変して、みんな違ってみんないいという絶対評価のあり方を研究推進し、強い優越感や劣等感を持たせることをなくせるよう是正していく必要があると思います。そのようにしつつ、人類存在の根本である自尊心、自己肯定感＝真の自由＝真の自信というような方程式のもと、教育界における健全な人間一人ひとりの存在価値の周知徹底を目指すということが大切だと思います。

子どもたちにとって、殊に思春期以降は親や教師や他の大人たちから他己選択、自己責任的に強制される「転ばぬ先の杖」の配慮を必要最低限に抑えられるよう、大人たちの意思統一を図ることが大切だと思います。その上で自己選択、自己責任的に真の自由を高めさせてあげられるように、「転んだ松葉杖」として子どもたちのチャレンジによる転倒も温かく見守りつつ、彼らが助けを求め信頼し寄りかかってきても折れずにどっしりといられるような大人になっていくことを最重要課題としていく、これらは子どもたちの問題というよりは大人たちこそが学び深めつつ変化し成長していかなければならない重要課題だと思います。

コロナ対策や不審者対策、オレオレ詐欺対策などの情報過多、または情報操作が偏って多すぎるために、人間同士が信じあうことの大切さよりも目の前の人間を疑ったり警戒したりすることの方が優先される教育により、緊張感や不信感を強いられ続けるような学校や社会、世の中になっています。そのあり方を積極的に見つめ直して、目の前の人を善悪も含めた丸ごと人間として信じ直すことから再出発したいと思います。同様に自分自身も信じ直したくましく生き始めることを応援したいと思います。

社会よりもまず自分自身、次に大切な家族親族、さらに身近な近隣の方々をまず大切にするということを周知徹底する。風雪などの災害時においても、学校や職場を最優先させることを強制するのではなく、まずは家族同士が、近隣の者同士がいかに協力し合い支え合い、日常生活を取り戻せることができるか、このことを最優先にし合う、そのことを実現するために学校内の教育活動や職場内の経済活動が一時期滞ろうとも家族の絆や地域住民の絆を大切にし、生活に活きた学びを深めさせてあげたいと思います。文部科学省から与えられている内容を細かく全てするというよりは、長野県独自でもいいので、阿部知事を中心として本当に子どもらしく子どもが成長し合えるような社会であり、学校づくりというものをフリースクールとかそういうことよりも、義務教育として多くの時間を子どもたちが過ごさなければならない状況の中

でこそ実現するべきだと思います。ありがとうございました。

【次世代サポート課長　塩原昭夫】
　最後になりますが、Ｋさんお願いいたします。

【参加者Ｋ】
　不登校であっても地域で支えるためにということで、私たち社会福祉協議会としても平成29年度に生活困窮者自立支援法に基づく学習生活支援事業の委託を県から受けています。学習の意味合いを広く捉えながら、例えば不登校やひきこもりになったとしても、地域の中で子どもを育み社会に立つ力を養っていくきっかけづくりとして、様々なケースに対してそのお子さんや家庭に対してオーダーメイド型の支援ということで地域が持つ力を社協としてもコーディネートをしている、そんな役割を担っています。
　一例ですが、長年不登校が続き義務教育が終わった、そしてひきこもりとなったお子さんの学習支援にあたったところ、ご本人から社会体験を望む声がありまして、アルバイトをしたいということで歩いて通えるある事業所を紹介したところ、様々な失敗や経験を重ねながら、なんとか４年以上ですが今もアルバイトとして続いております。このお子さんのアルバイトに繋がる過程も、人と人との関わりに慣れていないということで、かなりその事業所の方々に多くの支えをいただいていたと思います。
　今、お子さんの学習支援事業としては関わりはありませんでしたが、その地域との関わりはより一層強くなったと思います。私たちも平成29年からこうして５年が経過しましたが、私たちのさりげない支援が少しずつですが実を結んでいる､そんな重要な役割だと捉えております。地域の資源と繋がっていること、こうしたコーディネートを発揮されるというところが私たちの今の業務として個別支援だけではない、そして地域支援を一体となって進めていくというところのコーディネート力は今後も重要になってくると考えています。
　私自身も仕事で地域住民の支えを受けながら、そして職場の仲間と支え合いながら業務に励んでいますが、こうした地域と人を繋ぐコーディネート業務は、子どもたちを入口とした世帯支援に繋ぐことができると考えています。こうしたケアをする人のケアが今後重要になってくると私も感じています。今後とも県の力添えをいただきながら、こうしたコーディネート業務から世帯支援まで、より世帯を丸ごと捉えるようなかたちの支援を充実させていきたいと思いますので、今後ともご理解ご協力をお願いしたいと思います。

【次世代サポート課長　塩原昭夫】

ありがとうございました。

支援者の皆さまからご発言をいただきましたけれども、ここで意見交換に入りたいと思います。事業を含めまして支援者ということで、皆さん何かご意見あればぜひお願いいたします。

【長野県知事　阿部守一】

ごめんなさい。いつも縦割りでやるからあまり話がうまく進まないので、学校の先生側からの発言も先にしてもらったほうがいいような気がするんですけれど、いいでしょうか。

【次世代サポート課長　塩原昭夫】

それでは先に進めさせていただきます。

教育事務所のスクールソーシャルワーカーのＬさんお願いいたします。

【参加者Ｌ】

２点お願いします。

学校で、先生と子どもとの対話がだいぶ少ないのかなと感じます。うちの子もそうですが、相談事となるとなかなか先生に相談しなくて、先生は勉強を教える人だからみたいな感じでなかなか相談ができていません。例えば先ほど発言されたＢさんのように、元素記号についてお友だちに嫌なことを言われたり学びの変更をされたというようなこと、学校では学ばないという方法を選択されたことに対しては、もしも学校の先生ともう少し話が気軽にできるようであれば、もしかしたら学校でそういう元素記号をたくさんできるというような学びの変更ができたのではないのかなと思っております。

もう１つは居場所についてです。長野県はやはりどこの居場所に行くにも保護者の負担があります。保護者の方もお仕事をされています。そして私たち自身も送迎はできません。なので、例えばタクシー会社とかとうまく連携をしていただいて、タクシーのお金とかは県で支援していただければ子どもがタクシーに支援者と乗れるとか、そうすることによって居場所の幅が増えるのではないのかなと思っております。あとは近所の方とかが社協のような登録制度で一緒に電車の駅まで行っていただけるような仕組みがあればいろんな方と一緒に居場所に行けたりとかタクシーに乗れたりというところで、公共交通機関の不便さに少しでも対処できればいいかなと思っております。

【次世代サポート課長　塩原昭夫】

ありがとうございました。では、中学校のＦ先生、お願いいたします。

【参加者Ｆ】

よろしくお願いします。

言いたいことは居場所をつくるということと、それから社会的な孤立というのを無くすということが１番大事だと思っています。自分たちの学校では、今スクリーニング会議といって隠れ不登校みたいな子も見つけ出すような会議をやっています。そこの中でスクールカウンセラーとかソーシャルワーカーとか発達の関係で、特別支援の巡回相談員の人たちと一緒に「この子どうしようかな」みたいなことをやっています。それで、引っかかってきた子たちを学校の先生が支援会議というのをやって、１か月に１回ぐらいずつ話をしていきます。そうすると、学校に来ることが全部いいというわけではないのですが、今年はそれで不登校の数が激減しています。

そういうスクリーニング会議から支援会議という流れを県内の多くの先生方が勉強しています。私も教育事務所や教育委員会主催の会議とかで実践発表や講義をしています。自分中心になって先生方とリスキリングというような感じで研修をやっています。２年間ぐらいやりました。その中ですごく大事だなと思ったことなんですが、これは本当にお願いしたいなと思うんですけれども、岐阜市の不登校特例校でトワイライト通級といって夕方から夜に生徒を呼んで勉強を教えてくれたりとか、それから埼玉市はメタバースで仮想のところを作ってそこで登校するみたいなこともやっているような感じですので、そんなことができたらいいなということと、大阪市のように各校で一人ずつスクールソーシャルワーカーが配置されたりとか、それから先ほどの発言の中にもありましたが、不登校特例校の設置がとても大事なんじゃないかなということを思っています。

【次世代サポート課長　塩原昭夫】

ありがとうございました。それでは、学校関係者最後になりますが、Ｍさんお願いいたします。

【参加者M】

30年くらい前から不登校に関わってきました。この頃特に現場で感じている子どもの抑圧感と同時に大人力への問いかけというものを地域から発信したいと思います。

ここは昔から続くおもちゃ屋です。時代の流れとともに大人も子どもも社会も変化してきました。今店の前を通り過ぎる若いお母さんと子どもの会話で一番多いのが「あ、おもちゃ屋さんだ」って子どもさんが楽しそうに言うとすかさず「買わないよ」という会話です。子どもさ

んはおもちゃ屋を見つけたことがただ嬉しいだけなのかもしれないんですが、その気持ちにちょっと蓋をされたような、私も子どもの立場になって考えてその言葉を聞いています。

それから古い店ですので、今50～60ぐらいになった大人の方がここでの昔の思い出をよく語ってくれることがあります。「うちの親父がね」って１年に１回だけ子どものためにここでおもちゃを買ってくれた。自分が迷っていると親父が「早く決めろ」と怒った。「お店だって遅くまでお前のために開けていてくれるんだぞ」と言ったと。そしたらここのおじさん、私の先代になりますが「いいよいいよ」って「自分で納得できるまでゆっくり選びな」って言ったと、「あの言葉を一生覚えている」というふうにおっしゃいました。

今の子どもたちの様子にこんな２つのエピソードを重ね合わせた時、私自身への反省も含めて今の大人力の脆弱さのようなことを思います。根っこの愛情力というか命を愛おしむ柔らかな力が大人の中にだんだんに狭く硬くなってきたようなイメージです。

以下時間がありませんので短文でまとめます。大切だと思うものは子どもの感情。そしてその人といることで子どもが、私が私でいられる、私を決められるそんな大人の存在。それから学び。人と人の間で自分が分かってくるそんな学び、意識や技術ではなく心に他者を慈しむ力、コンパッションが湧いてくるような学び。残る私の人生の時間をこんなことに心を込めて過ごしていきたい。ちょっと自分の確認のために発言させていただきました。

【次世代サポート課長　塩原昭夫】

ありがとうございました。以上で発言予定の方は終了でございます。

不登校特例校ですとか様々な意見が出ましたが、今出ましたご意見に対しまして何かご発言のある方いらっしゃいますか。

【長野県知事　阿部守一】

少し私のほうからいいでしょうか。

居場所の話を先ほど先送りにしてしまっているので、もう１回ちゃんと戻らなければいけないと思っているんですが、その前に具体的なご提案をいただいたＨさんと先ほどのＥさんのチームも同じで、実態把握って必要なんですよね。しかも学校目線ではない子どもたち目線であったり保護者側の思いというのが、どうも文部科学省の調査だと上から目線調査になっているのかなと私も気になるので、そこはしっかり考えるようにしたいと思います。考えるようにしたいと思うといっても、教育委員会が調査をしなければいけないので教育委員会と相談をしたいと思いますが、いつもこれまたはいはいと決めて行政が質問票を作ってやるので、せっかくこういうかたちでやっているので、今日集まっている人たちと一緒にこういう調査をやったほ

うがいいんじゃないのというふうに一緒に考えるというのがいいかなと。先ほど発言してもらったＥさんとかＨさんとか問題意識のある人が設問を作らないと、ピントがずれた設問を聞いてもまたやり直しみたいな話になってしまってもいけないので、少なくともＥさんグループとＨさんは協力してこういう調査をやる必要があるということを一緒に考えてもらえないでしょうか。

【参加者Ｈ】
はい、ありがとうございます。実際に私たちも不登校の保護者のためのお話会や勉強会を開いていますので、そこでのお母さんたちの声ですとかそういうものをアンケート集計してということは実際行っているんですが、正式なものではないからという理由なのか分かりませんが、なかなか届けたところであまり反映されていないなという気がします。

【長野県知事　阿部守一】
それはどこに届けてくれたんですか。県に届けてくれているの。

【参加者Ｈ】
市です。市長さん、教育長さんとの懇談というところに資料をお持ちして話はしております。

【長野県知事　阿部守一】
みんなでどういう実態把握をすればいいか考えてください。やりましょう。よろしくお願いします。
それから、中間教室と官民連携というのは私も必要な話だと思うので、先ほどの居場所の話も含めて不登校の子どもたちをサポートする体制のあり方というのは行政だけでもできないと思いますし、民間だけでも一生懸命やっていただいているけれど、結構やり続けるのが大変だと、あるいは関わる人が全部手弁当で大変みたいな話だったり、あるいはそうではなくても非常に時間とか期日を限定するという話になるので、そこは行政と民間でどうやって力を合わせるかというのは、工夫は必要なんだと私も思います。
それから、教育政策アドバイザーの設置はいい話かなと私は思っているんですが、私が市町村にこれを置けというのは越権行為になってしまうので、これはたぶん心ある市町村はいろんな人たちの意見をちゃんと聞いてやってもらえると思いますが、この職員を置けというのは私は賛成ですけれど、県からやれというのは、我々は国からこれを置けというのは基本的に反対する立場なので、地方自治なので本来は地元の皆さんがこういう教育の仕方にしたらいいんじ

ゃないかなとか、こういう人をアドバイザーにしたらいいんじゃないですかというのをもっと提案してもらったほうがいいかなと思います。そこだけ私が「はい」とは言わないですけれど、皆さんどうですか。

【参加者H】

実際これもつい最近市長室のほうに出向きまして、教育アドバイザーの設置をお願いいたしますという提案をしてまいったところです。

【長野県知事　阿部守一】

はい、よろしくお願いします。

それから、Ｉさんこの間お世話になりました。若い皆さんがいっぱい集まってくれたので、私も大変刺激を受けて参考になりました。今日こうやって私も参加させてもらっていますが、不登校支援はおっしゃるとおり大きな市ばかりの都道府県はたぶん大体市町村に任せておけば何とかなってしまうところが多いですが、長野県の場合は小さな町や村が多いので、なかなかそうはいかないと思っています。そこは市町村の皆さんとも相談しながら広域で対応を考えます。

それから、夜間中学、不登校特例校の設置は教育委員会で考えるということにはなっていますので、具体的に検討していきますが、課題は先ほどの通学や送り迎えとか、長野県は長野市だけ松本市だけに置いても全く意味がないので、相当これは市町村や民間の人たちと一緒に考えなければいけない話だと思っています。

それから、先ほどの「夢みる小学校」は「専門家が言っていることは私が考えていたのと同じだ」というのは非常に重要な話だなと思います。先ほどＢさんから言ってもらったことも私は素晴らしいなと思っていますし、要は子どもの意見をもっと聴かなければいけないなというのは重要な話だと思います。先ほどどなたかもおっしゃったように、不登校の問題は子どもの問題の扱いにしてしまってはいけないなというのは、今日皆さんのお話を聞いて私改めて感じていますし、大人側の常識や認識、大人の価値観が実は誤っているのではないかというところから考えていかないと、現象面だけ、もぐらたたきみたいに不登校の子どもが出たからこうしましょうとやっていてもエンドレスかなという感じはします。今日はＢさんから素晴らしい発言をしてもらったので、子どもたちの意見をもっとしっかり我々も聴きながら取り組みたいと思います。

それからＪさん、いろいろお話いただいたことは大変重い話が多いなというふうに思って伺っていました。自尊心や自己肯定感が本当に育める教育になっているのかということは我々も

しっかり考えなければいけないと思いますし、今申し上げたように大人が変わるというのは私も重要なキーワードだと思います。長野県は「信州やまほいく」を進めて、自然の中で子どもたちを伸び伸びと育てようということ、非認知能力も高まるし長野県の自然も活かせるということで始めていますが、やまほいくに行かせている保護者の人たちと話をすると、小学校に行くとガラッと変わってしまうので困っちゃうという話をよく聞きます。学校のあり方が20世紀型モデルからちょっとは変わっているけれど、抜本的には変わりきれていないところが問題ではないかなと思いますし、そこらへん子どもたち中心に学校の教育のあり方というのはぜひ考えていきたいと思いますが、おっしゃっていただいたように文科省が手取り足取り優しくきめ細かく指導してくれているおかげで、なかなか自主的に変えられないところが学校現場の先生方も教育委員会の皆さんも困っているんじゃないかと思っているので、そういうところをどうやって変えるかということは一緒に考えていきたいと思います。

それからＫさんの学校支援の話は、地域とのコーディネートが大事だというのは我々一般行政側もしっかり考えていきたいと思いますし、冒頭Ｇさんが言ってくれた療育とか福祉サービスの利用ができなくなっちゃうという話も、学校と地域社会とか教育委員会所管教育行政とその他行政のところの狭間に陥ってしまう子どもたちがないようにしなければいけないという問題だと思いますので、そこもしっかり問題意識を持ちたいと思います。

あとはＬさんがおっしゃっていた子どもとの対話が少ないというのは致命的な問題かなと思います。今回、ずっと県内回って対話をさせていただく中で、教職員の配置数の問題はいくつかのところで問題提起されていますが、もっと教員の数を増やさないといけない感じでしょうか。誰か学校の先生の数はどうあるべきだと思いますか。

【参加者Ｌ】

学校の人数が増えたところで、もしかしたら印刷とかそういうような事務的なところに回されるというようなこともあるので､やはり役割の明記というのがあるとありがたいと思います。

【長野県知事　阿部守一】

役割の明記というのはどういうことですか。

【参加者Ｌ】

例えば職員が増えたところで、今事務的なことが大変なので印刷をしてくれとか、そういうところに回ってはいけないので、例えば職員が増えたらその立場がどういうところかというところも確認していただければと思います。

【長野県知事　阿部守一】

そうですね。これは学校の数を増やすというのは予算に関わる話なので私がしっかり考えなければいけない分野なんですが、私は増やしたほうがいいなと思っているし、Ｌさんおっしゃるように子どもと向き合う先生を増やすというのがもちろん基本的な考えですが、ただ冒頭言ったように先生の役割は今までどおりで本当にいいのって実は思っているんですけれども。

【参加者Ｊ】

教員の数の問題というよりも質の問題だと思います。要は教員が本当に子どもの気持ちに寄り添うというか、子どもの気持ちの自然さということを大切にするような教員であるのかないのかということが大事だと思います。

今のＩＴ言語だとか英語教育だとかを詰め込むということがまず先にあるようなことばかり考えている教員が増えても、これは大きく子どもたちを緊張させるだけだと思うんです。そういうことではなくて本当に子どもは遊びたいんです。子どもは自ら発見したいんです。子どもは自ら好きなことを話したいんです。学びたくないことは学びたくないんです。やりたくないことはやりたくないんです。子どもの気持ちを本当にちゃんと教師自身わかっているのかどうか。

【長野県知事　阿部守一】

Ｄさんも手を挙げているのでＤさんどうぞ。Ｊさんありがとうございました。

【参加者Ｄ】

ありがとうございます。今子どもは遊びたいんだとか、そういったところは本当に私も今不登校の子どもたちの様子を見て感じていて、先ほどＢさんからお話がありましたが、一緒に生活しているメンバーなんですけれども、彼は科学的な火、焚火を見て面白くなってそれが例えば理科と科学に繋がっていったり、うちの娘も九九や掛け算、漢字ができるようになったから本を読むのが面白くなったりだとか教科とか全然分断でもないし別れたものでもないし、それから生活のリンクの中で本当に学び､分かることが面白いということを獲得していっています。それは先生の指導、目の付け所のコーディネートの力がとてもあるなと感じていて、安易に予算や人を増やせばいいということでは、今の課題については解決できないかなと直感的には感じています。

【長野県知事　阿部守一】

ありがとうございます。Ｇさんも手を挙げているのでＧさんどうぞ。その後Ａさんどうぞ。

【参加者Ｇ】

ありがとうございます。私たちのほうでもやはり学校に行けない子たちが外で遊んでいることによって、そこからだんだんといろんなことの学びに繋がるというのは現状見させていただいたり、私自身先ほど話題に出ていた夢パークというところで勤めさせていただいたことがあって、そこで見ていた子たちもやはり遊んでいる中で、いろんな活動体験をする中で自分を取り戻すというよりは、いろんなものに触れていく中で興味関心を得てどんどん学びたい気持ちが出てくるというのを見させていただいているので、何かがあればいいというわけではないですけれども、そういうところに関していろんな場所の確保があればいいというところと、実際教員の方とも今連携を取らせていただいている中で、かなりお忙しいなというところを肌で感じていて、そこを全部学校側に押し付けるのではなく学校側の先生の仕事量を考えてあげないと、周りの方たちが全部学校がやればいいとなるとやはりそこは違うかなと私たちの現場ではかなり感じております。

【長野県知事　阿部守一】

どうもありがとうございます。ではＡさんお願いします。

【参加者Ａ】

ありがとうございます。夜間校だとか特例だとか、あるいは学校の数や先生が増えても子どもは楽しいとか面白いということから学びが始まるので、そこを大事にした先生たちも、例えばパソコンが好きだとかピアノが好きだとか、先生の好きなことを子どもたちと楽しむというようなそんな先生が増えるといいなと思います。そこに子どもたちは一緒に学びをしていくんじゃないかなと思うので、増やすとしたらそんなふうにしてほしいなと思うのと、先日新聞で手紙や交換日記を転校してきた子が渡そうと思ったら「学校ではダメだよ」と言われて、その子は苦しんだというのを見たんですが、結局そういう縛りみたいなことを増やすというようなことに増えた教員が今度は大人の縛りが強くなっていくようだとしたら、子どもは余計行きにくくなるので、そうではなくて先生たちがそれはなんでそうなったかというと何か悪口を書いたことがきっかけだと言うんです。そのことを先生たちが子どもたちと一緒に考えるような学び、そんなふうに先生たちがいけるように教員の数を増やすということに費やしてほしいなと思います。先生たちはそんなことをやりたいんじゃないかなと思います。

【長野県知事　阿部守一】

Ｊさん手を挙げているの少し待っていてください。

今学校の先生方は忙しくて大変だという話と、それからもっと子どもたちに遊びの中から楽しい中から関心を持ってもらえるような教育にしたほうがいいんじゃないかという話が出ていて、学校現場の人たちもいろいろ問題意識を持ってやっているけれど、どうして学校は変われないんでしょうか。

【参加者Ｎ】

今お問いかけのことの答えになるかわかりませんが、私、前任校が大規模の中学校で、その中学校は本当に不登校不適応のお子さんが何十人もいる学校でした。個々に対応した不登校不適応対応というのが非常に難しいなというのを感じた中で、国のほうも登校を最終目標として社会的な自立を目指すんだということが打ち出されてきたので、ここはとても大事だなというふうに思っています。

あるお子さんですが、小学校の頃から不登校でフリースクールに通っているお子さんでした。中学３年間も１回も授業に参加したことがありません。ただ、その学校でフリースクールと連携をしてできるところは評定を付けましょうということで、評定を付けて本人や家族の願いである高校に合格することができました。高校に合格して１学期の途中で辞めてしまったんですが、その生徒はそのことを決して後悔しているわけではなく、保護者の方もそうです。チャレンジできたということがとても大事だし、それから今はアルバイトをして自分の好きなことを目標を立ててやっていると。つまり社会的自立はそのお子さんにできたということがある。その過程の中で職員たちが非常にそのお子さんに寄り添って勉強を見たりだとか、フリースクールの先生たちと懇談したりということを取りました。

それからたくさんいる不登校のお子さんの中で、先生たちも例えば部活が午後６時30分に終わる、それから午後７時から家庭訪問するとか、午後７時から放課後に登校してくる子どもたちを対応するということも珍しくなくて、非常に先生たちもとても大変な中、でも何とか不登校のお子さんたちに寄り添うという気持ちがある。そういうことも学校側にはありますよということはお伝えしておきたいと思います。ありがとうございました。

【長野県知事　阿部守一】

ありがとうございます。

居場所の話をずっと飛ばしてきているんですけれど、ただ居場所の話ってどういう人たちが

支え手になるかというのと、資金的にどうやって持続可能性を担保するのかという話と、それから例えば一定程度税金の負担で維持するとした時に、どれぐらいの水準ならみんなの理解と協力が得られるかということを考えなければいけないんだと思いますし、そこは我々行政もしっかり考えたいと思います。ですが、ただ私がずっと思っているのと皆さんと今日お話をして感じているのはもちろん居場所も必要ですよねということもあるんですが、たぶん学校本体も変わらないと根本的な問題解決にならないのではないかなと思ってずっとお話を伺っていました。例えば県内の町にできたとある学校へ見学に行きましたが、午前中はみんな外で学年の壁を取っ払って勉強しているのか遊んでいるのか分からない感じで過ごしています。学ぶ内容も一人ひとりばらばらなことをやっていて、例えば勉強が遅れている子どもに周りの子どもが教えてあげたりということを普通に学校の中で行っています。だけど、公立学校に行った途端に全然そうではなくて、私が昔受けたような教育をやっているので、それだと先ほどからずっと出ているように子どもの楽しいこと、子どもが関心を持つことというのは当然できないですよね。１時間目は国語をやりましょう、２時間目は社会科ですと言われたら、せっかく数学が楽しくなったのに今日は数学の時間がなくて国語と社会と体育かと思ったら、学校に行きたくなくなっちゃうというのは、今日の皆さんのお話を聞いているとそういう感覚を多くの人が持っているので、では学校は何で変わらないのか、学校を変えてしまえばいいんじゃないのというところについてはみなさんどう思っているんでしょうか。なんで変わらないの。

Ｊさんずっと手を挙げていただいたから手短にお願いします。あとＤさん、Ｅさんお願いします。

【参加者Ｊ】

やはり私思うんですが、あまりにも日本は西欧の先進諸国をモデルに取り過ぎていると思うんです。ルソーのエミールという古典がありますが、そこで子どもを自然に返せという言葉があると思います。その自然に返せというのは大自然、大宇宙の大自然であると同時に、子どもが人間として子どもらしくどう自然に子どもは子どもであるのか、これは河合隼雄先生が昔言っていたんですが、子どものうち児童期は幼虫であらせろと言っています。そうして思春期がさなぎで高校生以降が成蝶、羽ばたく大人の蝶だとしたときに子どもが子どもであること、子どもが子どもでありきることがどういうことか、それはサッカー少年団やスポーツ少年団に送り込むことでもないと思うし、授業に行かせることでもないと思うし、そのようなことよりも自然発生的に子どもが自ら主体的に遊びを作り出して創造してクリエイトして、そこのところで仲間集団も思いやりも優しさもそこで自然発生をする、これは優しさも思いやりも大人が教え込むことではなくて、子どもたち人間の自らの心の中にもともとあるものですよね、良心と

してその良心がおのずと働き出すような、そういう環境をいかにちゃんと保障してあげることができるか、そういうことがすごく大事だと思います。

【長野県知事　阿部守一】

私もやまほいくに行っている子どもたちや保護者と話すと、危ないこと危険なことは、先ほどの転ばぬ先の杖じゃないけれど全然そんなことやらないと、火でも熱ければ火は熱いものだと思うし、転んでけがをすればここに登ったらこういう危険なことがあるんだというのがわかると、そうやって人間は学んでいくんだと思うので、先ほどの転ばぬ先の杖をやりすぎというところが社会全般にあるし。

学校はその傾向があって、こうやって学校の先生の問題にしてしまうとまたいけなくて、学校の先生は保護者や地域の人たちに求められていると思うんです。いつも私のところには保護者は保護者、学校の先生は学校の先生とかになっているんですが、こうやってみんなで話し合ってどう思っているのか、どう改善すればいいのかというのをやっていったほうがいいような気がするんですが、先ほど手を挙げてくれていたＤさんとＥさん、Ｎ先生、時間になっちゃったので簡単に一言ずつお願いします。

【参加者Ｄ】

私、学校教育って非常によくできていると思っていて、選択肢としてはすごくいい選択肢だと思っています。なので、いいとか悪いとかそこの問題から直そうというよりは、今は学校も行けるしフリースクールも行けるし、例えば居場所もまずはいる場所が必要な人もいたり、もっと学びたい人が学べる場所があったり、その選択肢の幅、バリエーションが豊かになるという視点で全体を考えていっていただけたらとっても素敵になるんじゃないかなと思っています。

【参加者Ｅ】

皆さんの話を聞いていて、私たちの子どもは不登校なので学校の悪いところばかりに目がいったなと思うんですが､今の学校のいいところは約束をしなくてもたくさんの友達に会えたり、たくさんの大人の方たちと触れ合えるところだと思うので、やはり学校の中身を変えていくことが大事だと思います。

母子登校をして教室の様子を見ていると、45分間いい子に座っている子どもたちのほうが不自然に見えてきたりもします。１年生がこんなにじっとしていて大丈夫なのかな、と思ったりもします。なので、私たちの子どもは不登校というかたちで学校にＮＯを言っていますが、今学校に通えている子どもたちのことも考えて教育を変えていく必要があると思いました。あり

がとうございました。

【長野県知事　阿部守一】
　いいところも悪いところもあるけれど、いいところもちゃんと見ましょうねという話は非常にいろんなことをやる上で重要だと思います。N先生お願いします。

【参加者N】
　ありがとうございます。学校で例えば理科が好きだからじゃあ１日理科をやっていてもいいよと言われても、もちろんいかないということは当たり前のことだと思います。学習指導要領に実数が決められている以上、すべての教科を扱わなければいけないということ、それから進学という問題もあります。その辺で学校というのはある意味の自由さというのは失われているかと思います。その上でそれを緩めていただいている特例校の設置というのを急いでまず試しにしてみると、そこでいろいろ広がっていく、改善していくということをやってみたらどうかなと思っています。ありがとうございました。

【長野県知事　阿部守一】
　N先生、私は学習指導要領ってもっと無視してもいいと思っているんです。要は何年生とか何歳の時にここまでやらなきゃいけませんというふうにあまりにも決められ過ぎているから学校の自由度がなくなっているんじゃないかと思っているんですが、今の制度上は学習指導要領を守りなさいと言われているのは分かりますけれど、ただ実際いろんな学校が工夫しながらそれを打破しちゃっているわけですよね。そこらへんは学校現場の先生としてどう感じていらっしゃいますか。

【参加者N】
　そうですね、やっぱりある程度自由にすることはできるかもしれませんが、最終的には中学だと高校入試ということにぶつかっていくと、偏ったこればっかりというわけにはどうしても出てきちゃうなと、出口の部分での問題かなと。

【長野県知事　阿部守一】
　そうですね。不登校の話、実は教育の何というか映す鏡ではないかなと今日皆さんとお話をしていてすごく感じています。私高校入試も本当に今入試っているのかと、正直知事の立場でこんなこと言うと怒られちゃうかもしれないですけれど、ほとんどの子どもたちは高校に入っ

ているのに、何でわざわざ一生懸命みんなで入試をやらなければいけないのというのは率直に言って私感じていますけれども、時間がなくなったので。

【次世代サポート課長　塩原昭夫】
　さらにご意見があれば我々のほうにメールでいただければと思います。

【長野県知事　阿部守一】
　最後にＨさんＩさん、一言ずつもしあったらどうぞ。それからＱ町の町長と教育長にずっと聞いてもらっているので、市町村行政や市町村教育委員会として最後一言言ってもらいます。では、ＨさんＩさんまずお願いします。

【参加者Ｈ】
　ありがとうございます。先ほどからたくさんいろんな方のお話をお聞きしていまして、学校だけ行政だけということではなくて、私たち保護者自身も子どもに対する眼差しというものを、もっと子どもを真ん中にした温かなものにしていかなければと思うんです。子どもを見ていると、好きなことをやっていると「また好きなことばかりやっていて」みたいな気持ちになるんです。私たちもそうやって育ってきたので、ただ好きなことやっているってそんなにいけないことかなとそんなふうに思えるような映画がここにあります。先ほどから出しているんですが、１月22日に「ゆめパのじかん」自主上映会を千曲市で行う予定です。こちらを観ていただくと、本当に子どもの権利とか子どもへの眼差しとかそういうことについて考えさせられるような内容になっていますので、ぜひたくさんの人に観ていただければと思います。どうもありがとうございました。

【参加者Ｉ】
　今日はありがとうございました。私は保護者として学校の先生との面談によく伺ったりとか教育関係の仕事をしておりますので、学校の先生と近いところでお仕事をしているんですが、学校の先生ってすごく大変だなと、今いじめ問題や不登校問題であるとかいろいろなところで授業以外のことにも関わっていらっしゃってお忙しいと思う中、長野県では独特の宿題であったりとか信州教育的な部分があるのかなというのを県外から移住してきて思いました。宿題も大変熱心に出していただいていますし、そういう見る時間というのも長野県の先生方は他県よりひょっとして長時間見られていらっしゃるかなと思います。そういった意味で先生自身がもっと時間を持てるような、ご自身の楽しいことに関わっていけるような自由さを持っていただ

くことも、長い目でみると不登校の子どもたちにとってよい結果をもたらすのではないかと思っています。そういう中で、やはり諸外国のほうでは不登校支援とかそういったおうちの問題やいじめ問題は専門家の人たち、例えばソーシャルワーカーですとか心理カウンセラーの方々が関わっていらっしゃって、学校の中で専門性を活かした業務に入っていらっしゃるところを見ました。

また養護学校に先日見学に行かせていただいたんですが、特別支援の学校では当然のようにそういった先生方が入っていらっしゃるので、ぜひ長野県でも専門性を持った方々に学校の中に入っていただいて、先生方の数を増やすだけでなく、この近隣の市町村でも町自体でカウンセラーを入れていらっしゃる自治体もありますけれども、私どものように400人の村ではなかなかそういうわけにはいかないので、例えば周りの山村とかで１人のスクールソーシャルワーカー、カウンセラーを置いていただくとか、そういった方面でも考えていただけたらと思います。長くなりましたがよろしくお願いします。

【長野県知事　阿部守一】

県でもソーシャルワーカーやスクールカウンセラーを増やす方向で考えなければと思っています。南信で何人いるの。もっと広域では何人かいるんですけれど、たぶん人数が足りないんだと思いますので。

【参加者Ｉ】

ただ、日々やっぱり子どもたちの姿を見ていただきながら相談していただくというのが理想的だと思いますので、よろしくお願いします。

【長野県知事　阿部守一】

エンドレスになっちゃうんですが、せっかくだからＭさんとＪさん手を挙げているので、15秒ずつお願いします。

【参加者M】

長く子どもと関わっていると、ＨＯＷ　ＴＯとか表面でとかここじゃなくて深く掘っていきたくなるんです。その時に一人の人が一人の人と子どもであっても大人であってもどう出会うとか、それからその人をどう理解するかとか基本的なところを大人力としてやっていきたい、そこをみんなで話し合って、今日大人の中には保護者や学校の先生も地域の方もそれから民間の支援団体もみんなそこに入ってくると思うんです。その人たちがそこでどんなことをするか、

居場所があるのはとても大事だけれど、その居場所だけではないというところを私たちは深めていきたいなということを聞いていて思いました。

【参加者Ｊ】

不登校の子のことで、私の実践の中で県内のとある私立高校のカウンセリングルームで見させていただいた不登校の生徒さんが、中学校の時にほぼ登校できなかったんです。登校できないまま恐る恐る面接に来ました。面接に行ったらそこであなたにはいいところがあるよ、あなたは素晴らしいんだよと言ってくれて、中学校の勉強の内容が習得できているかどうかはいいから、いつでもどんどん学校に来てねと、そうやって迎え入れられるその基礎力や学校の能力が身についているか身についていないかではなくて、その目の前の人を信頼して、その子のやる気を引き出すようにあなたにはいいところがあるんだよと迎え入れてくれた高校で、ちゃんとそこは３年間卒業する中で生徒会活動もやり、そして学校推薦も受けて専門学校や大学に進学していく生徒さんがいるわけです。それは私立だからできるということではなくて、大人たち、高校の先生方が目の前の成績の相対評価で見るのではなくて、目の前の子が学びたい、成長したいと思っているその気持ちこそ大切にして受け入れて、責任を３年間持ち切るかどうかそこのところがすごい大事だと思います。

【長野県知事　阿部守一】

どうもありがとうございます。Ｂさん先ほど手あげてくれた？最後発言したいですか。

【参加者Ｂ】

ちょっと話がそれちゃうんですけれど、一条校ってあるじゃないですか。フリースクールを一条校にしちゃうということは私はだめだと思っていて。

【長野県知事　阿部守一】

例えばとあるインターナショナルスクールがあるけど、あそこは英語の授業をやって若干日本のカリキュラムと違うけど一条校になっているんですよね。たぶんＢさんが言いたいのは、何でここは学校として認めるけど、一生懸命例えば元素記号を勉強してやっても何でここは学校として認められないのかという話だと思うので、そこは国の制度の問題ですが、私たち行政としてもできるだけ柔軟に考えていかなければいけないなと思っています。先ほど言ったように、学習指導要領とか国がいろんなことを決めているのは変えちゃったほうがいいと思っていて、地域で県や市町村でもっとできるだけ自分たちでこうしたい、Ｂさんみたいな子たちの意

見も聞いたり保護者の意見も聞いたり、あるいはそこで教えている先生方がやっぱりうちの地域とかうちにきている子どもたちにこういう教育をしようよということをもっと自由に語り合っていけるようにしたいなというのが私の願いなので、Ｂさんの感じていることとは思いは同じだと思っているのでよろしくお願いします。ありがとうございます。

Ｑ町町長でも教育長でも今のお話、市町村の行政責任者の方がいらっしゃらなかったので、少しコメントしていただけないでしょうか。

【参加者Ｏ】

ありがとうございます。知事がそういうふうに考えてくださっていること本当にありがたく思います。教育行政として今町はフリースクールを支援していますが、やはり子どもたち多様ですので多様な学びを実現していく、多様な居場所を確保していく必要があるかなと思っています。そのためにできることをこれからもやっていきたいと思いますし、もう１つはやっぱり学校の話が出ましたが、学習指導要領には従っていかなければいけないと思うんですが、先生方真面目なので教科書をきちんと教えないといけないと思っている。そこは変えなければいけないところではないかなと思っています。

【参加者Ｐ】

ありがとうございました。不登校の父親でもあります。うちの息子は好奇心が折れてしまって学校に行けなくなっている状態ですので、先ほどから話があるみたいに今行けなくなっている子、今の子どもたちへの政策は私たちも考えなければいけない。それと同時に教育を変えるには知事と市町村長は政治家でもありますので、教育を変えるための力、声をあげていく、そのためには今日みたいな皆さんの言葉というのは私たちの力になるので、どんどんそういった言葉、この場だけではなくまたメールでもいただければ変わっていくなと、その力に知事も頑張っていただけるなと思いました。ありがとうございました。

【長野県知事　阿部守一】

どうもありがとうございました。予定の時間をだいぶオーバーしてしまって恐縮ですが、これはまだ続けるということでいいですか。こういう場は定期的に続けていきたいと思っていますので、またご参加してもらえればと思いますし、今日いただいた意見は我々のほうで少し整理をして、皆さんにフィードバックする方法ってありますか。

【こども若者局長　野中祥子】

できます。

【長野県知事　阿部守一】
こんな意見が出ていたのでこういうことをやっていきますというのをまたフィードバックして、それをまた次回皆さんからもフィードバックしてもらいたいと思いますし、先ほど言ったように、実態調査はＨさんやＥさんグループの皆さんと一緒に考えるということでぜひやってみたいと思いますので、教育委員会にも協力していただきたいと思いますし、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーのところは予算は増やす方向で要求していますか。

【教育委員会事務局心の支援課長　滝澤崇】
増やす方向で要求しています。

【長野県知事　阿部守一】
教育委員会で増やす方向で予算要求してもらっているみたいなので、私のところでもしっかり考えたいと思います。
それからフリースクール支援はどうでしょうか。

【こども若者局長　野中祥子】
しっかり検討させていただきます。

【長野県知事　阿部守一】
子ども若者局のほうで今日いただいているご意見も含めてしっかり検討していきたいと思いますので、一足飛びに皆さんが期待している100％理想の姿にはなかなか持っていけないかもしれないですが、今日いただいたご意見の方向性は私もそうだなと思うことが多いので、ぜひ引き続き一緒になってとにかくやっぱり子どもたちの自主性とか自由とか興味関心とか、それが１番でそこをどうやって私たち大人が育てていく、見守っていく、サポートしていく、そういうことが重要だと思いますので、ぜひ力をこれから合わせて取り組んでいきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。どうも今日はありがとうございました。

【次世代サポート課長　塩原昭夫】
どうもありがとうございました。本日ご発言いただいた皆さま、ご視聴された皆さま、長時間にわたり誠にありがとうございました。

それでは以上を持ちまして県政タウンミーティングを終了とさせていただきます。本当にありがとうございました。